

第三者コメント

村田製作所グループ「CSRレポート2007」を読んで



神戸大学大学院
経営学研究科教授
國部 克彦 氏

1. 読みやすさと従業員の参加を重視した編集方針

今年度の報告書は読者への読みやすさを重視し、写真を多く取り入れ、見出しなども工夫されています。これは、ムラタがCSRレポートを使用して、多様なステークホルダーとコミュニケーションをしようとする意欲の現れであり、その効果が出ることを期待します。従業員の声が多く反映されていることも今年度の報告書の特徴です。実際に活動する社員の顔が見えることはCSR報告書として大変重要ですし、社内での動機付けにもなります。今後は、取引先や顧客、地域社会の声なども取り入れられると、コミュニケーション手段としての機能がより高まると思います。

2. 生産量の変化を見据えた環境行動計画を

ムラタの2006年度の環境パフォーマンスは、第3次環境行動計画に対してほぼ目標を達成しています。省エネルギーを実現する生産設備開発に関する記述(⇒P37参照)なども注目すべき内容です。ただし、生産量の増加と関係してVOCなどの総量ベースの目標は未達となっています。このあたりは、総量ベースの目標と原単位ベースの目標の組み合わせ方を精査し、企業活動にあった目標の設定と総量ベースでの削減のシナリオを工夫されることを期待します。さらに、このような環境保全活動全体を総括できるような環境経営指標の開発を検討されてもよいと思われます。

3. CSR目標の設定を

環境に関しては、上記のように明確な目標をもとにPDCAを回しておられますが、社会性の事項についても、定性的でも良いので目標を設定されることをお勧めします。そして、その観点から1年間の活動をレビューされれば、CSR報告書がCSR活動を評価・促進する効果を持つこととなります。その場合、社会にとっての重要な課題とムラタにとっての重要な課題は何かを十分に検討することが必要で、そのようなプロセスを経ることによって企業の「CSR力」が向上すると考えます。

4. 重要な啓発活動

環境や社会の問題を解決するためには一企業だけの努力ではなく、社会全体の理解と支援が必要です。そのためにムラタが環境学習や環境コミュニケーションに力を入られていることは重要です。ムラタの進んだ環境意識と活動を幅広く社会に説明することが、ムラタを支える社会的基盤となります。CSR報告書がその重要な媒体として活用されることを期待します。